

氏名 竹 久 義 明

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学 位 授 与 番 号 乙 第 925 号

学 位 授 与 の 日 付 昭和53年 3 月31日

学 位 授 与 の 要 件 博士の学位論文提出者
(学位規則第 5 条第 2 項該当)

学 位 論 文 題 目 橋本病及び Basedow 病患者の細胞性免疫に関する研究
第 1 編：M I F 及びリンパ球芽球化反応の検討
第 2 編：橋本病における単球・マクロファージの免疫学的機能と
その意義

論 文 審 査 委 員 教授 長 島 秀 夫 教授 木 村 郁 郎 教授 小 川 勝 士

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

橋本病患者の甲状腺にはリンパ球浸潤がつよく、細胞性免疫による病因性が示唆されるが、その詳細な機構については未だ解明されていない。そこで著者は、Basedow病患者と対比しながら橋本病患者の細胞性免疫について検討を加え、以下の成績を得た。

第 1 編：橋本病及び Basedow 病患者末梢血よりリンパ球を分離し、PHAによる芽球化現象、甲状腺成分を抗原としたリンパ球のM I F産生能について検討した。その結果、橋本病患者では、PHAによる芽球化率は26例中14例53%の症例において低下し、M I Fは甲状腺マイクロゾーム分画を抗原とした場合、40例中12例30%の症例で検出された。またM I F産生が著明な7例では、抗サイログロブリン抗体価が低値であった。これらのことは、橋本病の病態成立にはT-cellの異常と甲状腺マイクロゾーム分画などの甲状腺成分を抗原にした細胞性免疫の機構が何らかの関与をしていることが推定せられ、血清抗体は細胞性免疫と抗原を競合して、むしろ細胞性免疫の機構には抑制的に働くことが憶測された。一方、Basedow病患者ではこれらの異常を示す所見は認められなかった。

第 2 編：橋本病の甲状腺組織には、単球・マクロファージ系細胞の浸潤も少なくない。著者が検索した範囲では、マクロファージの浸潤は、び慢性甲状腺炎23例中12例52%、散在性甲状腺炎16例中13例81%において、おもに変性した汙胞腔内にみられ、コロイド物質を貪食している像が認められた。また電顕像では、特に散在性甲状腺炎においては、多数の胞体突起と貪食空泡を有し、よく発達したGolgi体、粗面小胞体を有する核など活動型のものが多くみられた。そこで、これらの細胞の病因性を検討する目的で、組織内浸潤マクロファージの

precursorと考えられる末梢血単球の甲状腺組織結合能を、サイログロブリン被覆ヒトO型赤血球(E-Tg)との結合により検討し、さらにそれら単球の自己抗原認識に関与していると考えられる単球親和性抗体を検索した。その結果、橋本病患者14例中7例50%で単球のE-Tgとの特異的結合の増加がみられ、また患者血清中には17例中14例82%に単球親和性抗サイログロブリン抗体が認められた。これらのことは、単球・マクロファージ系細胞の抗体依存性細胞性免疫の機構が橋本病の病因に関与している可能性をつよく示唆する所見と考えられた。

論文審査の結果の要旨

橋本病の病態の成立にはT細胞の異常と甲状腺マイクロゾーム分画等を抗原とした細胞性免疫の機構が何らかの関与をしており、血清抗体はむしろ細胞性免疫の機構には抑制的に働くこと、また、その病因には単球・マクロファージ系細胞の抗体依存性細胞性免疫の機構が関与している可能性もあける等重要な価値ある知見を得たものと認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。